

P1-038

自閉スペクトラム症のある学童期の児童・生徒をもつ主介護者のストレスに関する研究～影響する要因の解析～

水上 裕文¹、木原 健二^{1,2}、山本 暁生¹、高田 哲¹

¹神戸大学大学院 保健学研究科、
²にこにこハウス医療福祉センター

【はじめに】

自閉スペクトラム症のある子ども(ASD児)をもつ保護者は、日々の子育ての中でストレスを感じ、抑うつ度が高まることが多く、患児本人だけでなく、家族をも含んだ包括的な支援が必要と考えられる。一方、同じような状況にあっても、個人により逆境から立ち直る能力が異なることが注目され、レジリエンスと呼ばれている。レジリエンスでは、1.逆境の経験、2.最終的にその逆境にうまく適応することの2点が重要である。近年、レジリエンスという概念を家族に応用し、家族自体も肯定的な資源として捉えた家族レジリエンス理論が提唱されるようになってきた。本研究では、学童期のASD児をもつ家族を対象に、主介護者のストレスへの影響要因について、子どもの状況だけではなく、家族の社会・経済的要因及びレジリエンスをも含めて検討した。

【方法】

子どもの発達を専門に診ている3つの医療施設において、学童期(6～18歳)のASD児をもち、保護者が共に通院している189家族を対象に、独自に作成したフェイスシート、家族レジリエンス測定尺度から構成された無記名式質問紙を用いて調査を行った。ストレスへの影響要因を検討するため、子どものIQ、合併症、保護者の収入、教育歴等を含む19項目について単変量解析を行った後、ストレスの有無を従属変数とし、重回帰分析を実施した。同様に、従属変数を家族レジリエンス尺度得点として重回帰分析を実施した。

【倫理】

本研究は神戸大学大学院保健学研究科倫理委員会の許可の下、家族の同意を得て施行した。

【結果】

1)主介護者のストレスには、主介護者の健康状態とレジリエンス測定尺度得点の関係していた。2)子どもの年齢、IQ、てんかんなどの身体疾患、および家族の年収などとは関係がなかった。3)家族レジリエンス尺度得点に影響する要因としては、主介護者の健康状態とストレスへの対処方法の有無が抽出された。

【考察】

主介護者のストレスには、子どもの臨床症状だけでなく、主介護者自身の健康状態や家族の状況が関与していた。主介護者の健康状態は、自身のストレス発症に直接に関与するのみならず、家族レジリエンスを通じても影響を与えていた。ストレスを軽減するための方法として、主介護者の健康状態を維持・向上させるとともに、ストレスへの対処方法を提供することによって、家族全体のレジリエンスを高めることが重要と考えられた。

P1-039

保育者を対象とした実践的なペアレント・トレーニング研修の経験

古川 恵美¹、有年 貴子²、寺川 えり子²、小林 穂高³、石崎 優子⁴

¹畿央大学 教育学部、
²名張市子ども発達支援センター、
³名張市立病院小児科、
⁴関西医科大学 小児科学講座

【背景】

発達障害のある子どもへの支援の一つとして、ペアレント・トレーニングが推奨されている。就学前の子どもたちやその保護者に関わる幼稚園教諭・保育士がペアレント・トレーニングについて理解することは重要であるが、概要だけでなくロールプレイング等の実践的な内容を含む研修の機会は少ない。

【目的】

保育者を対象とした実践的なペアレント・トレーニング研修の効果を明らかにする。

【対象と方法】

対象はA県B市で2017年2月に施行された全8時間(1回4時間)のペアレント・トレーニングについての研修に参加した幼稚園教諭・保育士18人。方法は研修開始前と終了後に、家族の自信度20項目のうち17項目を教員としての立場から記入を求め、自由記述でさらに学びたいと思うことや宿題を体験した感想を自由記述で回答を求めた。ペアレント・トレーニングについての研修は全国ペアレント・トレーニング研究集会(2015年)が提起した基本プラットフォームの内容とし、最初の4時間は行動観察とほめること等の概要を中心に、残りの4時間はグループワークやロールプレイ等の演習を取り入れた。統計学的解析は研修前後の自信度を対応のあるスチューデントのt検定を用いて比較した(SPSS Ver. 24)。自由記述とした感想については、自身の保育に関わることおよび保護者支援に関わる内容が記載されているものについてカテゴリー化した。

【結果】

研修前後での自信度をt検定により検証したところ、いずれも有意であった($p < 0.05$)。自由記述からは、自身の保育について、＜自分のほめる判断基準を見直す＞＜ほめることを練習する＞＜行動を分けて考えることが重要＞＜子どもの達成感につながる指示の大切さ＞等のカテゴリーが抽出された。保護者支援について＜今までの関わりを否定しすぎない＞＜ほめることを前提とした指示の出し方＞＜行動を分析するために客観的に関わる＞等のカテゴリーが抽出された。グループワークやロールプレイングを通して学びながら体験もでき自分の保育を見直す機会になったことも記されていた。

【結語】

発達障害のある子どもの保護者に対するペアレント・トレーニングを保育者が理解するためには、概要だけではなく実践的に学ぶ機会が必要である。